

学術論文の書き方について

神戸大学経済経営研究所

家森信善

1. 初めに

私は大学を卒業して大学院に進学し、そのまま大学に就職をしました。最初の就職先は姫路獨協大学で、次に、名古屋大学に転職し、2014年からは神戸大学に勤務しています。名古屋大学に講師として採用され、助教授、教授と昇進し、また、神戸大学に教授として採用されるときに、いわゆる業績審査を受けました。審査対象になった業績とは、端的に言うと、国内外の優れたジャーナルに掲載された論文のことを意味します。(ただし、大学によって評価基準は多様で、そうしたジャーナル論文以外の研究活動を評価する大学もあります。)そうした環境で過ごしてきましたので、いい論文を書くことに必死になってきました。

幸いにも、2009年9月に、第4回日本FP学会奨励賞を、2015年9月に、第10回日本FP学会最優秀論文賞(上山仁恵氏との共同受賞)を受賞することができました。残念ながら、最近、日本FP学会賞の受賞者が出ていません。会員の皆さんに良い論文を書いてもらいたいと思い、家森の狭い経験からのアドバイスを試みます。ただし、論文の書き方は多様ですので、以下は、一つの意見ぐらいに思ってください。

2. 明確な問題意識を持つこと

論文を執筆する動機は、自分の研究によって明らかにしたことを社会に知ってもらい、社会を良い方向に変えていきたいからだと思えます。したがって、いい論文は、何を成し遂げたかを簡単に述べられるものだと思います。明確な問題意識がなければ、いろいろなことはしているが、それぞれが支離滅裂で全体として何がやりたかったのかわからないといったことが起こってしまいます。

FP学会賞は、「独創的で優れた研究」を表彰することになっていますので、学術的な論文が期待されています。したがって、問題意識が学術的なものでなければ評価はされないのはもちろんですが、他方で、FPの分野は優れて実践的ですので、数式を使った分析だけが学術的なものと評価されるわけではないことも強調しておきたいです。

3. たくさんの優れた論文を読むこと

皆さんが実務において感じておられる問題意識を、学術的な問題に変換することがまず大事なことになります。そのためには、どうしたらよいかといえば、関連する優れた学術論文をたくさん読むことにつきます。まさに、真似をすることから学ぶわけです。私は、これまでに大学院で非常に多くの学生を指導してきましたが、しっかりした論文を書いてもらうために、当該分野の優れた論文を最低100本は読むようにと指導してきました。1日中論文に向き合ってもごく一部しか読めないこともありますから、なかなか大変ですが、他の研究者がどのような形で当該問題を取り扱おうとしているのかを理解し、それをベースにして自分の問題意識を学術仮説に変換する作業が不可欠です。

※本稿の著作権は日本FP学会・執筆者に帰属します。

そして、こうしてたくさん論文を読むことによって、今までに何がわかっているのか、逆に、何がわかっていないのかがわかります。そうすると、自分の分析のどこまでが既存の結果の確認であり、どこが今までにない「新規」なものなのかがしっかりと把握できます。

いい論文を書くには、書くものの何十倍ものインプットをしておくことが不可欠なのです。

4. 研究論文の構成

ただ、問題意識だけあれば良い論文が書けるかというとそうではありません。たとえば、皆さんが強烈な問題意識を持っているとして、それを日本語のわからないアメリカ人に日本語でいくら説明しても、なかなか伝わらないはずで、適切に内容を理解してもらうためには、英語で説明しないとけません。つまり、論文においてもきちんとした様式に従って書かなければ、意図がなかなか伝わらないのです。

アメリカ人になら英語ですし、中国人になら中国語で話さなければならないように、だれに向けて書くかによって、書きぶりは当然に異なってきます。

したがって、まずは、学者向けの論文として標準的な型にしたがって論文を書いてみて、それを応用して変形していくのが良いと思います。私が標準的であると思うのは、次のようなものです。

- 1 問題意識
- 2 当該分野のサーベイ
- 3 分析すべき仮説の設定
- 4 分析手法や分析データの検討
- 5 分析
- 6 分析結果の検討

先ほど、インプットが不可欠と記しましたが、それはサーベイの部分のみに必要となるものではありません。分析手法の検討や、結果の検討などすべても部分で、先行研究との比較を意識して記述していくのが標準的です。たとえば、「A という変数を説明変数として採用するのは〇〇理論に基づいているし、XXX 論文で実際採用されており、プラスの係数を得ているが、別の YYY 論文ではマイナスの有意な係数を得ており、××といった議論をしている。それに対して、当論文は、云々」といった形になります。

そうした議論を踏まえて初めて、論文で得た分析結果が、最初の問題意識に対してどんな含意を持っているのかを明確に示すことができます。

5. 優れた論文の探し方

以上はやや抽象的でしたが、具体的な注意事項も書いておきたいと思います。優れた論文をどのように探すかです。これは一つの方法だけではなく、いくつもの方法を重ねていって、漏れがないようにしていくことが望ましいです。

まず、その分野の代表的な学術雑誌といわれるものに掲載されている論文に直接あたることです。たとえば、日本語で FP 研究といえば、当然、我が学会の学会誌『ファイナンシャル・プランニング研究』があげられます。本誌に掲載されている査読論文などは大変な力作が多く、参考になるはずで、また、日本金融学会の学会誌『金融経済研究』や、連携協定を結んでいる生活経済学会の『生活経済学研究』

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

にも FP に関係する研究論文が掲載されます。

これらの学術雑誌に掲載される論文は、原則として査読を得ています。最近、コロナ感染症についての研究成果が報道される際に、「査読前の」結果であるといったことが付言されることが多くなっており、「査読」という制度について学界外でも知られるようになったように思います。査読制とは、投稿された論文が信頼できるかを、第三者の専門家（匿名で複数であることが普通）に審査をしてもらい、その審査者の持った疑問点を投稿者に返し、（この段階で改訂の見込みがないと判断される場合は再投稿を認めない）、投稿者は改訂作業によってその疑問を解消できた場合に、当該論文が掲載される仕組みです。専門家のチェックが入っているので、その論文は信頼できるとされるわけです。

日本語での関連論文を探すなら、国立情報学研究所 (NII)が運営している、CiNii Articles をお勧めします。これは無料で、広範に雑誌記事を探すことができます。執筆日 (2021年9月5日) に、「金融リテラシー」をキーワード検索してみたところ、検索結果は 271 本でした。そのリストから、おもしろそうなものを探していくこととなります。ただ、日本語論文の場合、要約がついていないことが多いために、データベースでヒットするのはタイトルに「金融リテラシー」の用語が入っている場合のみであり、思わぬ論文を見落とすリスクはあります。しかし、いくつかの論文を読めば、大事な論文なら引用されていることが多いので、そこで気がつくと思います。また、日本語雑誌には査読のない雑誌が多いことにも注意しておかねばなりません。

FP 研究を真剣に行おうとすれば、国内の研究だけでは不十分でしょう。海外の研究に関しては、私は、Web of Science (WoS と略称) というデータベースを使っています。これは、査読雑誌に厳しい基準を置いてごく一部の一流の査読雑誌に掲載されている論文だけを収録しています。また、それぞれの論文が他の論文に何回引用されているかもわかります。毎年、ノーベル賞の発表の時期になると、受賞予想記事が出ますが、その根拠の一つがここで得られる引用総数です。ここで、「優れた論文」がわかれば、それを入手して読むこととなります。ただし、学界でも問題になっているのですが、多くの雑誌論文が有料です。私の場合は、神戸大学が非常に高額な購読料を支払ってくれているので、ほぼ不自由なく論文が読めますが、そうでないと非常に難しいのが実情です。

WoS を使えば、膨大な数の論文が刊行される中で、「優れた論文」を効率的に見つけられるわけです。ただ、残念なことに、WoS の利用は、所属する大学などの研究機関が高額の料金を払っている場合のみ利用できます。それで、大学院生にでもなっている場合を除くと、WoS を利用することが難しい会員が多いことと思います。その場合には、Google Scholar が有益です。利用するには、次のアドレスにアクセスしてください。

<https://scholar.google.co.jp/>

こちらで、「金融リテラシー」を検索したところ、2650 件がヒットしました。Google Scholar は網羅的に検索してくれるので、見落としが減ります。また、有料版だけではなく、著者が自主的に公表している DP 版 (最終的な雑誌論文とは異なることがあるので、注意が必要です) なども検索してくれます。したがって、無料で読めたり、図書館に足を運ばなくても良かったりします。ただ、検索結果が多すぎるので、上手に検索をして絞っていかないといけません。もちろん、Google Scholar は英語の検索もできます。ちなみに、Financial literacy を検索してみたところ、なんと 176 万件 (!) という結果でした。

検索していくときに、キーワードを入力していくのが基本ですが、もう一つの有力な方法は、その分

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

野の有力研究者の名前を入れてみることで。たとえば、Olivia S. Mitchell (アメリカ・ペンシルベニア大学教授) を検索してみましょう。総引用回数は 41171 回であり、最も引用されている (3123 回) のは "The economic importance of financial literacy: Theory and evidence." *Journal of economic literature* 52.1 (2014) であることがわかります。この分野を研究しようと思うなら、この論文を読んでいるということはありませんね。

さて、同教授の論文を出版年順に並べ替えると、最近の研究がどんなことを取り扱っているのかがわかります。学界のリーダーが執筆する分野 (とくに、DP 版) から、研究のホットトピックスをうかがうことができます。日本に居ながらにして、欧米での研究の最新動向を知ることができるわけです。

もちろん、この検索は、Mitchell 教授のような超大物だけではなく、論文を書いている人ならすべてを検索してくれます。たとえば、Yamori Nobuyoshi の引用件数を調べてみたら 2009 件でした。皆さんが大学院で指導教員を探したりする際にも役に立つかもしれません。(ただし、指導教員選びは、論文の多さだけで選ぶのは危険です。念のため！)

6. むすび

2 年連続で FP 学会賞の対象がなかったということを総会で聞き、詳しい事情はわかりませんが、質の高い論文を書くためのアドバイスをしてみました。少しは参考になることがあったら幸いです。

最後に、本稿は、筆者の個人的経験に基づくアドバイスです。それぞれの先生方が、独自のご経験をお持ちですので、指導教授の先生により、論文指導も異なることを理解しておいていただき、よりよい論文の執筆を読者の皆様には目指していただきたいと思います。